

とっとりろうがっこう しょうがくぶ ねん じどう めい ちゅうがくぶ ねん せいと めい さくぶん しょうかい さくぶん よ
鳥取聾学校の小学部5年の児童2名と中学部3年の生徒2名の作文を紹介しつます。作文を讀ん
で、手話を学ぶことの大切さや意欲が高まることを期待しています。

しゅわ はなし 手話で話ができるようになりたいよ

とっとりけんりつとっとりろうがっこう しょうがくぶ ねん
鳥取県立鳥取聾学校 小学部5年

ぼくは、“^{かくしょう}ちょう覚障がい”があり、^{がっこう かよ}ろう学校に通っています。ろう学校では手話を使って話したり、^{べんきょう}勉強をしたりしています。手話は、^{しゅわ じぶん かんが つた}自分の考えを伝えることができるので便利です。

でも、ぼくは^{みみ き}耳が聞こえにくいから困ることがあります。例えば、テレビの音が分からなかったり、^{でんわ おと}電話の音が聞こえにくかったりします。また、^{くち はなし}口だけで話をされると^わ分かりません。だからそんなとき、^{しゅわ}手話をしてくれたらいいなあと思います。手話で話して通じたらとてもうれしいです。

ぼくは、^{しょうがっこう こうりゅう だいす}小学校での交流が大好きです。たくさんの^{とも}友だちといっしょに^{べんきょう}勉強したり、^{あそ}遊んだりできるからです。これから、^{とも}友だちや^{せんせい}先生と^{しゅわ はなし}手話で話ができるようになると、^{なかよ}もっと仲良くなれると思います。みんなと手話で話ができる日を楽しみにしています。

しゅわ はな 手話で話そう

とっとりけんりつとっとりろうがっこう しょうがくぶ ねん
鳥取県立鳥取聾学校 小学部5年

ぼくには、“ちょうかくしょうがい”という耳の聞こえにくい障がいがあります。そのために、生活の中で困ることがあります。例えば、ぼくの住んでいる地いきの学校へ交流学習に行ったとき、友だちの話している内容が分からないことがあります。分からないので、

「もう一度言って。」

と言いたいけれど、友だちが気を悪くしないか不安で言えないときもあります。だから、ぼくにはみんなが手話をしてくれたらいいなあという思いがあります。手話をしてくれたら、友だちがもっと増えると思います。

手話には、いいところがたくさんあります。例えば、ぼくの大好きなポケモンの話をするとき、手話を使うとポケモンの特長や技を出す様子などがよくわかって面白いです。

ぼくは、手話を使って話すことが大好きです。みなさんも手話を使って話してみてもいいですか。

わたし きも
私の気持ち

とっとりけんりつとっとりろうがっこう ちゅうがくぶ ねん
鳥取県立鳥取聾学校 中学部 3年

わたし ちょうかく しょう も う き ちか ひと まえ はな
私は聴覚に障がいを持っています。生まれつき聞こえないのです。近くににいる人に前から話しかけてもらえれば分かりますが、後ろから声をかけられても分かりません。

かぞく しんせき いっしょ とき こと わたし かぞく しんせき ちょうかく しょう ひと
家族と親戚と一緒にいる時の事です。私の家族にも親戚にも聴覚に障がいのある人はいません。私の母が妹やいとこと普通に話す様子を見て、「私の周りには聞こえる人ばかりで聴覚障がいなのは私だけだな。」と、何か寂しくなりました。私の耳のことを知っている親戚ばかりが大勢いる中でさえ、私のまわりには人の穴ができるのです。私が聞こえないから、会話をすることを怖がるのでしょうか。仕方ないと分かっている、悲しい気持ちになりました。でも、同時に羨ましいなという気持ちも生まれました。私だって一度でいいから私の母や父や妹や親戚や友だちの声が聞きたいと思ってしまったのです。

わたし ねんまえ なら ねんせい とき わたし はは とも
ところで、私は4年前からヒップ・ホップダンスを習っています。6年生の時、私の母の友だちの娘さんがヒップ・ホップダンスを習っていて、それがきっかけでそのスタジオに入りました。はじめは難しそうだなと思いましたが、やってみたらとても楽しくて夢中になってしまいました。私はダンスの曲の音を聞き取るのは難しいので、友だちや先生の様子を見て覚える

のです。ダンスを始めて4年目ですが、私はヒップ・ホップダンスをみんなと楽しく踊っています。困るのは、タイミングや動きが難しくて分からない時です。そういう時は、今は先生に教えてもらっています。

しかしある日、こんな出来事がありました。私はダンスの曲が聞こえにくいので、「どんなダンスをするの?」とか「タイミングが分からないんだけど。」などと、自分から分からない事を他の生徒に聞いたのです。でも、応えはありませんでした。彼女は私に答えずに、手話の分かる私の友人にお願いしたのです。多分、私が聞こえないから、答えても分からないと思ったのだと思います。私は寂しい気持ちになりました。たとえ、聞こえにくくても手話がわからなくても、逃げないで答えてほしかったのです。その事ですいぶん悩みましたが、自分の思いをダンスの先生に伝えました。先生は、

「分かりました。私が、あなたの事を皆に分かってもらえるよう伝えます。」

と言われました。その時は納得したのですが、3日くらい考えて、改めて先生に伝えました。

「すみません、やっぱり皆に聴覚障がいの方は皆に言わなくていいです。理由は私の気持ちを分かってくれる人はいるでしょうが、『え一面倒くさいな。』と思う人がいると思うからです。迷惑をかけたくないです。」

と。先生は、

「分かりました、あなたが、そう言うなら皆に伝えません。でも、これから先生はあなたの様子を見るようにします。だから分からない事があれば、何でも言ってくださいね。」

と言ってくださいました。先生に伝えて良かったと思いました。私も先生に甘えるばかりでなく、怖がらずにコミュニケーションをとって、分からない事を他の生徒に聞けるようにしていきたいと思いました。

本当はやっぱり聴覚障がいがあることを皆に伝えたいです。でも、私がこの願いをしたら、相手に迷惑がかかってしまうのではないかと怖くて、まだまだ伝えることができません。

私は、聞こえる聞こえないに関係なく、皆が差別しない、良い関係になれる環境にしていけたらいいなと思います。そして、もっとたくさんの方が手話に興味を持ってくれたらいいと思います。私の家族は手話やキューサインができますが、家族だけではダメなんです。誰もが、聴覚障がいなどの様々な障がいについて、何となくでもいいから、どんな事なのか理解して助け合える社会にしていきたいと思います。

私は私自身のできることをして、これから皆にもっと手話を知ってもらって、もっとお互いにコミュニケーションしやすい社会にしていきたいと思っています。例えば、学校や市役所で、初めて会う人に、私が「すみません、私は耳が聞こえないんです。」と言ったとします。対応する人がすぐ理解して、どうしたらよいか考えて行動できるようになるといいなと思います。そして、少しずつお互いに理解が深まり、「手話と指文字を教えてください。」と言われるようなコミュニケーションが出来る社会にしていきたいです。そのために私も、積極的に勇気を持って話しかけていきたいです。

「聴覚障がい者」として生きる

鳥取県立鳥取聾学校 中学部3年

皆さんは障がい者についてどんなことを知っていますか？障がい者とは一般に、目に見える体の一部が不自由である人のことをイメージする場合があります。しかし、実際には目に見えなかったり、よく注意して見ないとわからなかったりする障がいもあります。僕には障がいがあります。それは聴覚障がいです。

聴覚障がい者とは、耳が聞こえにくい、または聞こえない人のことです。耳が聞こえないということは、聞こえる人にとっては想像しにくいことだと思います。僕の場合、耳に掛けている補聴器に気付かなければ、聴覚障がい者であることはわからないと思います。しかし、補聴器を掛ければすべて聞こえるようになるのでしょうか。決してそうではありません。僕は補聴器を掛けていない時は音を聞くことができません。補聴器を掛けてはじめて、何か音がしていることがわかります。ただそれが何の音か、話している人が何という言葉を発音しているのかは、はっきりとはわかりません。雑音のように聞こえる音を相手の表情や身振り、口の形から何と言っているのか判断するのです。健聴者でも、耳を両手でふさいで会話してみると聴覚障がい者が他人の言っていることを正しく理解するのが難しいことは、分かってもらえると思います。

そのため近づいてくる車の音が分らず、交通事故にあう危険性も高いのです。

僕は耳が聞こえたら良かったのと思ってしまう時があります。それは健聴者とのコミュニケーションの場面です。家族や学校の先生など身近な人とは手話という手段でコミュニケーションを取ることができます。しかし近所の人など、聴覚障がい者や手話のことをあまり知らない人たちとのコミュニケーションは難しいのです。だから、僕は健聴者とコミュニケーションを取る時は基本的に身振りや筆談を用いていますが、なかなか伝わりにくいのが現実です。それは仕方がないと思いますが、相手も紙切れでいいので筆談の準備をしてくれたり、身振りで伝えてもらえたりしたらいいのに、と思ってしまう。でも本当につらいのは、僕が健聴者の方に

「すみません、僕は耳が聞こえにくいので、筆談をお願いします。」

と声をかけた時に、その人が何も言わず、行ってしまうことがあることです。応対ができない、急いでいるなど理由はあると思いますが、何も言わずに立ち去られることが続く。残念な気持ちになってしまいます。そのようなつらい思いがたまって親に向かって、「僕は何で聞こえないのだろう。健聴者として生まれたかった。」と責めてしまう時もありました。しかし、僕に障がいがあるのは、親のせいではありません。親を責めても、お互い嫌な気持ちになりますし、何も解決することはありません。自分が聴覚障がい者としてどう生きていくか、考えていかなければならないと思います。

僕は聾学校の小学部1年から中学部3年まで9年間、郡家東小学校や国府中学校との交流を

つづ ちゅうがくぶ しんがく ねんいっかい しゅわ ゆびもじこうりゅう
続けてきました。中学部に進学してからは年一回「手話・指文字交流」をしています。それは
ぼく ふだんつか しゅわ ゆびもじ こくふちゅうがっこう せいと し
僕たちが普段使っている手話や指文字を国府中学校の生徒に知ってもらうことをテーマにした
こうりゅうかい しゅわ おし れんしゅう しりょう つく じゅんび たいへん
交流会です。手話を教える練習をしたり、パワーポイントで資料を作ったりする準備は大変で
すが、おし ひと 「おはよう」とか「ありがとう」といった手話を使ってもらえるようになると、
とてもうれしくなります。さらに「なまえ ぶかつ しゅわ あらわ しつもん
名前」や「部活」を手話でどう表すかなど質問されると、
こた ちから はい けいけん ちようかくしやう しゃ しゅわ
答えるのについ力が入ってしまいます。このような経験から「聴覚障がい者」と「手話」につ
いてたくさん知ってほしいと思うだけでなく、知ってもらうために僕ができることを考えて、
こうどう たいせつ おも
行動していくことが大切だと思ようになりました。

ぼく しょうらい けんちやうしや ちようかくしやう しゃ たが きも つた あ ばしょ きかい つく
僕は将来、健聴者と聴覚障がい者が互いに気持ちを伝え合える場所や機会を作っていきたい
とおも じしん も ぼく ちようかくしやう しゃ い
と思います。そして、自信を持って「僕は聴覚障がい者として生きてよかった。」と言えるよう
になりたいです。